

「美術資料（山口県版）」の作成にあたって

足立 直之*・西村 優子**

Editing “Art Educational Information (Yamaguchi Prefecture Version)”

ADACHI Naoyuki*, NISHIMURA Yuuko**

(Received September 29, 2023)

『美術資料（山口県版）』は山口県で美術を学ぶ子どもたちにとってぜひ受け継いでほしい美術文化を掲載した資料集である。わずか12ページしかない誌面ではあるが、そこには「山口県の伝統と文化を受け継いでほしい」、「山口県にも誇れる美術環境や作品が多くある」、「山口県で学ぶならこのことは知っておいてほしい」という美術科教員としての想いが込められている。しかし、美術科教員にとって教えたいことや伝えたいことが異なる。地域の美術や身のまわりの美術にふれることの大切さについては指導すべき事項として学習指導要領には示されているが、それが具体的に何かは書かれていない。だからこそ、県内の美術科教員が集まり、話し合い、検討し、山口県版のページを作成している。本誌は、今回の編集の記録であり、今後も改訂していくための参考として残したいと考え、記したものである。

はじめに

山口県内の中学校において多くの学校が美術科で用いる資料集を活用している。そういった教員からは「資料が豊富であること」という意見が多い。資料の多さは美術の表現が多様であることに起因している。絵画表現ひとつをとっても、「何を描くか」という対象、「どのように描くか」という方法が多様である。「何を描くか」については人物や風景、想像の世界や抽象的な表現などがあり、人物の抽象的な表現など、対象が明確に区別できないものも多々ある。また、「どのように描くか」については、鉛筆、水彩絵の具、アクリル絵の具、墨、パステル、版表現などがある。さらに、絵画と彫刻、絵画とデザイン、絵画と工芸など絵画という領域の区別が難しい表現もある。このような多様な表現に対応し、学習する子どもたちにヒントとなることから、資料集は多く活用されている。

そのような資料集の中でも秀学社は、地域に応じたページを設けている。山口県においてもこれまで、県内の美術科教員が力を合わせて作成してきた。ここでは、学習指導要領の改訂にあわせて行われた『美術資料（山口県版）』の改訂について、県内の教員が連携し、作成した過程や意図をまとめることで、今後の改訂、さらな

る美術科教育の振興・発展に役立てるための記録として考えたものである。

1. 美術資料集の役割と意義

(1) 教科書と資料集の位置づけ

中学校美術科の教科書は、3社から出版されている¹⁾。学習指導要領に基づき、領域や表現方法等により多様な学習を視覚化している。それぞれに取り上げる作品は異なるが、表現においては総じて作家の作品と生徒作品を掲載し、どのような作品をつくればよいか分かりやすく示されている。また、作家の作品については、これまで歴史的に高く評価された過去の名作と呼ばれる作品が多く取り上げられていたが、近年は現代作家の作品が多く取り上げられている傾向がみられる。さらに、他教科と比べると冊子の大きさが大きく、紙や印刷の質が高い。写真の占める割合が高く、解説等の文字が少ないといった特徴もある。

教科書を用いて授業で指導する際は、アイデアや技法も詳細であるほどよいが、学習の意図とその成果として完成した作品を掲載している場合が多い。だからこそ、その過程を知るための資料集が必要となる。

美術科の資料集を出版しているどの社も表現において

* 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻、〒753-8513 山口市吉田1677-1, naoyuki-a@yamaguchi-u.ac.jp

** 美祿市立綾木小学校 教頭（前山口大学教育学部附属山口中学校 教諭）

は制作手順や技法を主とした構成となっており、鑑賞においては多様な作品を掲載している。ページについてはいずれの出版社も200ページ前後である。

(2) 美術資料集の活用状況

県内の美術科教員の研修会等で情報交換をした際に聞き取りを行った²⁾。資料集を購入している学校は多く、その理由としては、技法書として必要であること、豊富な資料がある方がよい等であった。その他、大規模校以外では美術科教員が任用されるところが少ないという実情があり、中規模・小規模校では臨時的任用教員や許可免で教える学校が多く、「資料集が指導する際にも役に立つ」「生徒が興味を示す」「将来的に持っていてよい内容である」といった理由から採用しているといった情報も聞けた。

そのような中であって、本誌で取り上げる秀学社の美術資料集を採用している割合が高いという実情が分かった。理由としては山口県のページを設けていること、また、『美術資料（山口県版）』の作成については山口県造形教育研究会の協力により、これまでも多くの教員が携わってきていることが背景にある。本山口県版については、2000年の発行から始められたものであり、2013年、

今回の2023年に改定している。そうした努力もあり、本県においては本資料集を活用しているのである。なお、秀学社の美術資料集については、多くの都道府県で工夫した独自のページを作成している。

2. 資料集の構成と特色

先に述べた通り、これまで山口県版は今回の改定を含め、3回の改定を行っている。その中で山口県らしい作品を掲載し、地域性を示してきた。内容を比較すると以下の表1の通りとなる。

2000年版では、美術館との連携が重視されていたこともあり、各館の紹介が主であった(図1-1, 2)。その後、2013年版では身のまわりの美術との関わりを重視した構成とした(図2)。今回の2023年版では、地域の特色や伝統文化を重視した構成とした。これまでの取組を引き継ぎつつ、少しずつ内容の変更と構成の工夫を行ってきた。特に今回の改訂ではページ数を4ページ増やし、内容を充実させることとなった。

このように地域性と領域のバランスを考え、中学生にとって山口県の独自性を意識できるように構成を考えた。

表1 これまでの資料集の内容比較

2000年版	p.1 山口県の美術館	p.2~6 各美術館紹介	p.7 工芸品、町並みと建造物	p.8 県内の美術館・博物館	
2013年版	p.1 山口県の美術	p.2,3 生活と美術 伝統工芸	p.4~7 各美術館紹介	p.8 雪舟 県内の美術館・博物館	
2023年版	p.1 山口県の風景と美術	p.2,3 町とアート シンボルマークとキャラクター	p.4 伝統工芸	p.5~10 歴史と美術 雪舟と山口	p.11,12 県内の美術館・博物館



図1-1 2000年版の全体構成



図1-2 2000年版の全体構成



図2 2013年版の全体構成

3. 作成までの過程と成果

(1) 編集委員について

編集委員の選考については、『美術資料（山口県版）』使用開始の約2年前に開始した。絵画、彫刻、デザイン、工芸、鑑賞などの領域や、区別の難しい多様な表現にも対応することができるように、山口県造形教育研究会の福田隆真会長から助言を得、様々な領域の制作や指導について詳しい教員を県内の中学校美術科教員の中から選んだ。

また、今後さらに改訂される可能性があることから、

次期編集員育成のために年齢層も考慮し、若手、中堅、ベテランそれぞれの立場の教員を選考した。多様でバランスのよい内容になるように配慮し、編集委員は選出された。

(2) 作成過程について

大まかな作成過程は、次の表2のとおりである。

①では、現状において資料集の山口県版や本体部分の使用状況を聞くとともに、今後、取り上げたい作品や作家について編集委員から意見を聞いた。活用については、美術科の授業に留まらず学校行事や総合的な学習の時間

で使用することも考えられるという意見もあった。また、今後掲載したい作品や作家として、アニメーションや山口県出身の活躍中の作家、地域の活動とつながりのある造形作品や造形活動も扱ってよいのではないかといった意見もあった。初回の会議以降、コロナウイルス感染症拡大の影響からなかなか会議をもつことができなかったが、編集委員各自が掲載作品や作家等について、調査やまとめをメールや郵送等でこまめに事務局へ連絡を入れ、情報共有を図った。

感染症拡大が落ち着きはじめ、参集が叶ったことから、②について会議をもった。ここでは、それまで編集委員が調べたりまとめたりした作品や作家を元に全体方針を決め、項目や掲載の意図を確認し合った。その中で、現時点で流行っている作品や作家もあるが、やはり「ある程度の時間を経て美術的価値が認められているものを取り上げる」という方向性が定まった。

③については、②を受けて山口大学の足立よりあらかじめ作成した全ページ（12ページ）のレイアウト案をもとに、編集会議において検討・決定をした。この会議において、山口県ゆかりの国宝である雪舟筆『四季山水図巻』を観音開きで掲載することを決定した。ページ数や予算との調整も叶い、今回の『美術資料（山口県版）』の特色のひとつとすることとした。

編集委員の労力を最も要したのが、④である。多数の作品等について使用や掲載の許可を申請・取得しなければならなかった。ページや地域で分担したが、感染症拡大防止のために注意を払いながら先方へ赴いたり、メールや手紙でのやりとりを重ねたりする必要があった。各編集委員が夏季休業中から晩秋にかけて根気よく地道に取り組み、必要な許可の取得を終えることができた。ま

た、これらの活動と並行して⑤も行った。作品等の説明文作成や各ページのレイアウトの調整などについて、委員同士や美術館等への確認を行い、11月下旬に初稿版へ向けて入稿することができた。

これらの活動を進めていくために役だったのがICTであった。編集委員がつながったグループ上で情報交換をすることができ、速やかな情報共有や役割分担をすることができた。さらに、業者の編集者がウェブ上で画像や文章についてやりとりできる手続きをとってくれたお陰で、速やかな情報の共有や交換が可能となった。

全ての画像と文章が出そろった時点で、⑥のように確認・修正の作業に入った。作業は大きく2回行った。まず、各編集委員に紙媒体の資料を送り、各自で修正箇所の確認をしてもらった。その後、一同に集まり、全体をみながら修正を行った。この際には、文字の誤植、フォントやサイズ等、細部に渡って確認した。

ここで、改めて全体の掲載作品のバランスを確認し、特に工芸作品がやや少ないことが浮き彫りとなった。多様な表現に対応する資料集とするため、工芸作品を数点新たに加えることにした。

確認・修正を終えた原稿を年が明けて入稿し、1月末には見本本が刷り上がった（図3）。見本本を編集委員各自に送付し、画像・文章・レイアウト等の最終確認をし、3月初旬に配給本の印刷に入った。

(3) 原稿の作成の具体

ここでは「雪舟と山口」、「萩焼」、「美術館」のページの原稿作成の具体について紹介する。

① 雪舟と山口

雪舟は日本を代表する画家である。雪舟作の国宝は6点あり、他の画家の追隨を許さない唯一無二の存在

表2 作成過程（実施内容と時期）

	作成過程	内 容	時 期
①	情報および意見交換	資料集の使用状況や今後、取り上げたい作品や作家について情報や意見交換	令和3年8月末～令和4年7月
②	編集について方針の検討・決定	掲載作家や作品について方針の検討・決定	令和4年6月
③	全体のレイアウトの作成・検討・決定	各ページのおおまかなレイアウトについて検討・決定	令和4年6月～7月
④	掲載作品の許可取り	著作物使用許可、掲載許可、作品使用の承諾等申請など	令和4年7月～11月下旬
⑤	説明文の作成とレイアウト再検討および初稿版の入稿	必要な説明文等の作成 各ページのレイアウトの再検討 初稿版のための入稿	令和4年7月～11月下旬
⑥	初稿版の確認・修正（2回）	誤植、フォントやサイズ等の確認	令和4年11月下旬～12月末
⑦	原稿入稿	見本本印刷のための入稿	令和5年1月初旬
⑧	見本本の確認・修正	見本本の画像・文字についての確認と修正	令和5年1月末～2月末
⑨	最終入稿	配給本印刷のための入稿	令和5年3月初旬

である。その雪舟が能力を大きく開花させたのは、中国から帰国して、50歳以降のことである。この中国に渡るに至った背景には、山口を治めていた大内氏の権力と財力があつた。また、帰国後も山口を拠点としていたことも事実である。そのように考えたとき、雪舟や当時の大内文化は、山口の美術を語る上で欠かせない存在といえと考へ、雪舟を取り上げることとした。

今回の改訂で一番のメイン作品をここで取り上げることとした。作品は『四季山水図巻』(国宝)である。本作品は、毛利博物館の所蔵品でもあり、大内氏から毛利氏へと受け継がれた至宝ともされている。16メー

トルもある作品でもあるので、どのように掲載するかは検討事項となった。最終的には中折、見開きの4ページを使用して2段で作品の全容を掲載することとした。『四季山水図巻』の紹介だけでなく、雪舟の紹介、大内文化の紹介も盛り込むこととした。取材にあたっては、『四季山水図巻』を所蔵している毛利博物館の柴原館長、山口県立美術館の荏開津学芸専門監、山口市文化財保護課の河崎主査にも協力していただき、原稿の確認を依頼し、本稿の完成までを行った。

特に毛利博物館の柴原館長においては文化財を受け継ぐことの重要性、山口県立美術館の荏開津学芸専門



図3 2023年版の全体構成

監からは雪舟の研究者としての専門的知見や表現の特徴、山口市文化財保護課の河崎主査からは大内文化の担当者としての様々な情報を説明していただいた。これまでも、様々な文献³⁾で雪舟や大内文化について調べてはいたが、実際の話を書くことで、さらに詳しい背景や貴重な情報を得ることができた。また、ここで得た情報をもとにさらに詳しい調査や研究をした。特に大内文化については地方文化として栄えていた軌跡を辿ることができた。実際には原稿に反映はされなかったが、時代背景や多様な文化を知る上で、貴重な情報を得ることができた(図3 p.7~10参照)。

② 萩焼

萩焼は、16世紀に毛利氏が朝鮮半島から職人を招き入れ、定着したものとされている。日本でも茶の湯の世界では人気のある焼き物で、素朴さがよいとされている。しかしながら、一見地味でそのよさを理解されることは少ない。知識として理解されても、その先の好みの問題は別である。中学生に山口県を代表する工芸品として、その価値は伝えていきたいと考え、掲載に至った。

そこで、他の焼き物との違いを明確にし、萩焼ならではのよさを知るために萩焼の窯元泉流山を訪問し、直接取材をすることとした。中でも「七化け」、「割高台」、「御本」の3点を特徴としてあげられ、制作過程については「登り窯」と「蹴ろくろ」について紹介していただいた。萩焼にしかないものとは言えないが、萩焼で大切にされてきた表現であり、伝統的な技法であることは、子どもたちにも伝えるべきこととして、掲載することとした(図3 p.4参照)。

③ 美術館

美術館に関する原稿の作成については、「美術館が所蔵している作品を掲載する」と「美術館自体を紹介すること」の2点を共通理解し、県内各地の以下の9施設を取り上げることとした(図3 p.11~12参照)。

- ア 山口県立美術館(山口市)
- イ 山口県立萩美術館・浦上記念館(萩市)
- ウ 香月泰男美術館(長門市)
- エ 下関市立美術館(下関市)
- オ ときわミュージアム(緑と花と彫刻の博物館)(宇部市)
- カ 熊谷美術館(萩市)
- キ 周南市郷土美術資料館・尾崎正章記念館(周南市)
- ク 周南市美術博物館(周南市)
- ケ 毛利博物館(防府市)

担当は、取材や依頼をしやすいうように各編集委員の生活拠点に近い場所とした。公的な施設、私的な施設

等に配慮しつつ、施設の選定は行った。作品については、基本的に美術館自体が所蔵作品につけている解説を尊重した。しかし、紙面の都合や他の作品とバランスを取る必要から、美術館に相談しながら解説文の長短や表現等を調整させてもらった。

また、もともと解説文がない作品については、編集委員が作成し、美術館に相談しながら作成するようにした。美術館自体の紹介原稿については、美術館の規模(所蔵作品や施設等)を鑑みながら掲載作品の数や紹介文の検討をした。各美術館が特色としている作品や取組が伝わりやすいように画像や文章を工夫するだけでなく、所在地がわかりやすいレイアウトにすることや配色などについて編集委員で検討を重ねた(図3 p.11~12参照)。

4. 教員の学びと研修・研究

今回の編集作業を通して多くの学びがあった。山口県造形教育研究会のメンバーを中心として取り組んできた。より結束力が高まったこと、共通理解ができたことがあげられるが、何よりも県内の多様な教材の発掘につながった。知らないことを知ること、知っていたことがさらに深まったこと、一人の調査、執筆の成果が互いの学びにつながった。

美術科教員が少なくなっている状況において、教科の研修機会が減ってきたことは否めない。さらに情報技術の発達に伴い、多様な資料や情報をインターネット等で簡単に手に入れることができるようになっている。便利なものは大いに活用する必要があるが、その一方で情報の確かさや、美術科教員として知識を得るだけでなく、価値観が狭くならないようにすることや感覚を磨くことなど、留意すべきことは多くある。多様であることを扱う教科である以上、美術科教員として必要不可欠な能力だと考えている。

互いに学びあうことで、得られるものは多い。それが研修であり、研究の必要性だとも考える。そのように考えると、美術資料集の作成は、研修の機会であり、研究の成果でもあった。

おわりに

美術は多様である。多様であるということは自由であるが、「何をつくるか」という段階で迷いやすく、「どのようにつくるか」という段階では一人ひとりの思いや願いが異なるため指導が難しい。だからこそ、そのきっかけが必要となる。そこに身近なものをを用いることが有効であると考え、山口県版を作成してきた。身近な風景、作家、作品や文化財、伝統は子どもたちの学びにより刺激となり、美術をより身近に感じさせるであろう。

約2年を費やし、『美術資料（山口県版）』の改訂版が完成した。準備から構成、資料収集、原稿の執筆、完成までをこの短期間で行えたことは、これまでの取組の積み重ねと全体の監修をしていただいた山口大学名誉教授であり山口県造形教育研究会の福田隆真会長をはじめ、編集委員の協力があったことである。改めて完成したのを見ると、山口県内に多くの美術教材があることが分かる。また、これでも一部の紹介に過ぎないことも実感できた。しかし、今後残すべき文化は、このような資料を作成することで継承されるものである。また、ここで関わった教員が学校現場で子どもたちに伝えていくことができることに、本資料集作成の意義もある。

今後も山口県の美術科教育の発展と山口県の美術文化の継承と創造に寄与できる資料をつくり続けることで、美術科教員としての資質・能力の向上に努めていきたい。

論）：廣森香純

山口大学教育学部附属光中学校教諭：中村賢太

秀学社編集部：神保浩康

また、『美術資料（山口県版）』で資料提供等いただいた毛利博物館をはじめ萩焼窯元泉流山、山口県立美術館等、関係各位にも多大な協力を得た。心よりお礼申し上げます。

注

- 1 中学校美術科教科書については、日本文教出版、開隆堂、光村図書出版の3社が出版している。
- 2 上記編集委員等から各地域における資料集の活用状況を把握した。また、山口県造形教育研究会の会合時に各地域の活用状況について情報交換する中で、状況を把握した。
- 3 宮島新一著『雪舟 旅逸の画家』青史出版2000.4、山口県立美術館／編『雪舟への旅』2006.11、山口県立美術館、雪舟研究会編集『雪舟等楊—「雪舟への旅」展研究図録』2006.11、柴田哲心著『雪舟の暗号』里文出版2009.9、久住泰正著『雪舟 孤高の画僧』宮帯出版社2016.11、古林青史著『天開の図画楼 雪舟等楊御伽説話』埼玉新聞社2020.6を元に取材を行った。

付記

本稿は、3-1, 3-2, 3-3-3を西村が担当し、それ以外を足立が担当した。

なお、『美術資料（山口県版）』は、下記委員等と協力し作成したものである。

山口大学名誉教授、山口県造形教育研究会会長：福田隆真

元下関市立長府中学校校長：山住英朗

柳井市立柳井中学校教諭：松田和子

周南市立岐陽中学校教諭：楊井朋子

宇部市立上宇部中学校教諭：勝見雅子

宇部市立厚南中学校教諭：迫田淳

下関市立彦島中学校教諭：平谷祐子

下関市立垢田中学校教諭（前下関市立川中中学校教